

**立教大学学術推進特別重点資金（立教SFR）**  
**大学院学生研究**  
**2024年度研究成果報告書**

<b>研究科名</b>	立教大学大学院 異文化コミュニケーション研究科 異文化コミュニケーション専攻		
<b>研究代表者</b> (2025年3月現在のものを記入)	在籍課程・学年		氏名
	<input type="checkbox"/> 博士前期課程 年 <input checked="" type="checkbox"/> 博士後期課程 1年		相澤彩子
<b>指導教員</b>	所属部局・職名		氏名
	異文化コミュニケーション学部・教授		中田達也
<b>自然・人文・社会の別</b>	自然 ・ 人文 ・ 社会	<b>個人・共同の別</b>	個人
<b>研究課題</b>	テスト形式が英語定型表現知識測定に及ぼす影響の研究		
<b>研究組織</b> (研究代表者・共同研究者) ※2025年3月現在のものを記入	在籍研究科・専攻・課程・学年		氏名
	異文化コミュニケーション研究科 異文化コミュニケーション専攻 博士課程後期課程 1年		相澤彩子
<b>研究期間</b>	2024 年度		
<b>研究経費</b> (1円単位)	(支出金額) 70,000円 / (採択金額) 70,000円		

**研究の概要** (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

当該研究の研究目的を含むこと。

これまでの語彙テスト研究の多くは個別の単語を扱ったものであり、どのようにすれば定型表現の知識を適切に測定できるかに関しては十分な示唆が得られていないことから、本研究では、定型表現の一種である phrasal expressions のテスト (Phrasal Vocabulary Size Test; PVST) に焦点を当てた。特に、テスト形式の違いが、PVST の妥当性・信頼性にどのような影響を与えるかを検証するために、意味再認形式 (4 択の多肢選択式) と意味再生形式 (日本語翻訳) のテストを実施した。より厳密な定型表現の測定が可能になることで、今後の語彙研究を発展させられるだけでなく、英語教員や学習者にとっても、指導の改善や学習計画の立案への活用が期待される。

**キーワード** (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[定型表現] [語彙テスト] [テスト形式]

**研究成果の概要** (図・グラフ等は使用しないこと。)

以下の視点を含めて記載のこと。

- ・当該研究は何をどこまで明らかにできたのか (できなかったのか)。
- ・何をもちいて研究成果 (経過) を達成できた (できなかった) と考えられるのか。  
自身が設定した研究目的・目標に照らして、その根拠がわかるよう記載のこと。

**【背景】**

二語以上から成り、特定の意味を形成する定型表現を用いることで、言語使用の正確性や流暢性が向上するなどの利点が得られるため、定型表現の知識は高度な外国語運用能力を身につけるためには必要不可欠であり、比較的近年になってから注目され始めた研究領域である。一方で、これまでの語彙テスト研究の多くは個別の単語を扱ったものである。“[T]here is still no consensus on the best ways to measure FL [formulaic language] and no test which has been recognized as a standard measurement”と Gyllstad and Schmitt (2018, p. 174) が指摘しているように、どのようにすれば定型表現の知識を適切に測定できるかに関して、これまでの研究では十分な示唆が得られていない。中でも、テスト形式について、定型表現を扱った研究はまだない。個別の単語を扱った研究では、意味再認形式 (多肢選択式) ではなく、意味再生形式 (自由記述式; 第一言語翻訳・パラフレーズ) を用いることで、より妥当性・信頼性の高い測定が可能になることが示唆されている (Gonzalez-Fernandez & Schmitt, 2020; Laufer & Goldstein, 2004; Stewart et al., 2024) が、定型表現でもこれを再現できるかを本研究では検証した。

定型表現はコロケーションやイディオムなど様々な種類に分けることができるが、本研究では、意味的透明性が低い、すなわち、構成要素の単語から全体の意味が容易に推測できない二語以上のまとまりである *phrasal expressions* に焦点を当てた。特に、*phrasal expressions* の知識を測定する *Phrasal Vocabulary Size Test (PVST; Martinez & Schmitt, 2011)* の妥当性・信頼性にテスト形式の違いがどのような影響を与えるかを検証することが目的である。

**【研究協力者・手続き】**

研究協力者は 2 年以内に取得した TOEIC Listening & Reading テストのスコアを持ち、日本の大学に所属する第一言語 (現在における主な使用言語) を日本語とする大学生・大学院生 159 名であった。参加者は実験室、バーチャル会議、クラウドソーシングのいずれかの環境で以下の 4 種類のテストを受験した。

- 1) PVST の意味再生形式
- 2) PVST の意味再認形式
- 3) Vocabulary Size Test (VST) の意味再生形式
- 4) VST の意味再認形式

**【分析】**

妥当性に関しては、混合効果モデルを用いて、PVST の異なるテスト形式のスコアに有意な違いがあるのかを調べた。固定効果として 2 つの PVST のテスト形式 (意味再認、意味再生) を指定し、ランダム効果として研究協力者ごとの個人差をモデル化した。さらに、Messick (1989, 1995) などの枠組みを用いて、(1)内容的妥当性、(2)実質的妥当性、(3)構造的妥当性、(4)一般化可能性妥当性、(5)外的妥当性、(6)結果的妥当性の 6 つの観点からも妥当性を分析した。信頼性はラッシュ信頼数係数を使用して、PVST のテスト項目間の一貫性を評価した。

**【結果】**

混合効果モデルによる検定の結果、PVST の意味再認形式の得点が意味再生形式の得点よりも統計的に有意に高かった。すなわち、英語フレーズ和訳による意味再生形式の方が、テスト受験者にとって難易度が高く、得点が低くなる傾向が確認された。また、両テスト形式の得点間の相関は有意であったが中程度にとどまった。信頼性の指標であるラッシュ信頼数係数は、PVST の意味再認形式、意味再生形式ともに .95 以上となり、いずれの形式も内部一貫性が高いものの、数的には意味再生形式がわずかに高い信頼性を示した。さらに、参加者の英語運用能力の指標として収集した TOEIC スコアとの関係を見ると、PVST の意味再認形式の得点と TOEIC スコアの相関の方が、PVST 意味再生形式の得点と TOEIC スコアの相関よりも高い結果となり、多肢選択式テストの方が TOEIC スコアとの関連が強いことが示唆された。

**研究成果の概要 (つづき)****【考察】**

以上の結果により、テスト形式の違いが英語定型表現の知識測定に与える影響は大きいことが明らかになった。特に、意味再生形式は意味再認形式に比べて参加者の得点が低く、難易度が高く、さらには、意味再認形式の方が学習者の総合的な英語知識 (TOEIC スコア) をより反映していると考えられる。一方、意味再認形式では、多肢選択式であるために推測による正答が含まれることで語彙知識が過大評価されるリスクが否めない。また、両形式のテスト得点の相関が中程度にとどまったことは、各形式のテストが部分的に異なる能力側面を測定している可能性も示している。

以下では、本研究の知見を評価研究の枠組みである Messick (1989, 1995) に照らして考察する。

**・内容的妥当性**

PVST は phrasal expressions の知識を測定するもので、Phrasal Expressions List の各頻度バンドから無作為に項目が抽出されている。意味認識・意味再生の 2 つの形式を用いることで、形式と意味の関係を異なるレベルで捉えられる。ただし、抽出された項目の意味的透明性の度合いがテスト作成時に考慮されていないことから、リストに含まれるフレーズをどの程度知っているかをテスト得点のみから断定するのは難しいと考えられる。

**・実質的妥当性**

テスト中の認知過程について直接的なデータ (思考発話など) は現段階では収集していないが、ラッシュモデルのフィット統計により、全ての項目が適切に機能していると判断された。

**・構造的妥当性**

各テストの Rasch 信頼性が .95 以上と高く、構造的整合性は良好と評価された。

**・一般化妥当性**

参加者は日本人大学生に限定されているため、一般化には注意が必要だが、テスト環境 (実験室・バーチャル会議・クラウドソーシング) によらず信頼性が高く、結果の一貫性が確認された。

**・外的妥当性**

PVST と TOEIC スコア間には中程度の相関が見られ、PVST は他の英語能力指標とも整合性があると確認された。

**・結果的妥当性**

本研究のテストは授業内に行うものであり、重大な社会的影響はない。ただし、学習動機付けや語彙学習の促進につながる可能性がある。

**【今後の展望】**

本研究の結果をどのように教育に応用できるかを模索することが今後の課題として挙げられる。さらに、本研究では phrasal expressions という一種類の定型表現のみを扱った。コロケーションなど別の種類の定型表現でも再現性研究を行うことで、単語や phrasal expressions のテストを用いた研究で得られた結果が他の定型表現にも応用できるのかの検証を試みたい。

**研究発表** (研究によって得られた研究成果を発表した①~④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて研究成果報告書提出フォームより提出してください(紙媒体等、研究成果報告書提出フォームから提出できない場合は、別途リサーチ・イニシアティブセンターへ提出してください)。

- ① 雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ② 図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③ シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④ その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

※修士論文・博士論文は含みません。

① 雑誌論文

Aizawa, A. (Under review). Validation of online L2 vocabulary tests: Test performance across laboratory, virtual meeting, and crowdsourcing contexts. *Research Methods in Applied Linguistics*. (審査中)

② 図書

なし

③ シンポジウム・公開講演会等の開催

なし

④ その他

〈学会発表〉

Aizawa, A. (July, 2025). *The effect of test format on assessing knowledge of English phrasal expressions*. LET 関東支部第 152 回(2025 年春季)研究大会.